



GENBA INNOVATION

現場イノベーション

創意工夫に富む現場の取組みやマネジメントの最前線を追う!!

ビル屋上階(塔屋1階)にて、所長と職員2名が出来形を確認。全面ガラスにより、周辺のビル街を一望することができる。

情報共有推進で 連携強化 自社ビル建替え事業を円滑に (仮称)TCGビル新築工事

コロナ禍が加速させたものの一つがデジタル化であり、更にそのなかの一つがリモート技術...
その傾向は多くの人が実感していることだろう。
多様化するコミュニケーション手段を巧みに取り入れ、現場運営に活用した事例を紹介する。

施主⇨施工者⇨ユーザーの構図

意思疎通の重要性が増す

JR田町駅と浜松町駅のなかほどの線路沿いに、曲面のガラスカーテンウォールが印象的なビルが建てられている。

「(仮称)TCGビル新築工事」は、高松コンストラクショングループの自社ビルとして旧TCGビルを建て替える形で計画され、青木あすなる建設(株)と高松建設(株)のJVが施工している。

TCGビル作業所の青木あすなる建設(株)・大楽啓一郎所長に工事の概要をお聞きした。

「旧ビルの解体が二〇一九年七月から始まり、全体の竣工予定が二〇二三年三月となっています。

この現場では、施主も施工者も同じグループ会社のため、もともと風通しは良いが、その分様々な変更対応など情報共有が重要であることから、「工事情報共有システム」を導入した。
発注者・設計監理者・元請・サブコンの四者をネットワークでつなぎ、質疑応答、設計変更などの際にオンラインの会議体としても活用している。

「設計と解体が始まったのが二〇一九年。その後のコロナ禍による世の中の情勢の変化に加え、働き方改革により管理側もユーザー

建物は制振構造で、当社の保有技術である摩擦ダンパー、レンズダンパー、耐震天井工法などを採用して、グループとしての技術力をアピールしていく場になっていきます。現在は躯体・外装が終わって内装工事を行っており、進捗率は六〇%といったところです」
敷地は国道一五号と国道一三〇号の交差点に面しており、すぐ近くをJR山手線が通るなど交通が錯綜している。



青木あすなる建設株式会社 東京建築本店 (仮称)TCGビル新築工事 青木あすなる・高松特定建設工事共同企業体 TCGビル作業所 所長

大楽 啓一郎 Keiichiro Dairaku

ザー側も意識が変わり、それが仕様にも反映されています。内部のレイアウトやビル管理システムなどですね。そういう変更対応の要望が頻繁に出たので、情報を多くの関係者で同時に共有できたのは大きなメリットでした。この情報共有がうまくいったことで、我々自身も使いやすいビルにすることができ、完成後のビル管理が効率化されたと思います。もちろん現場側からリクエストを出すこともありました。それが通りやすかったですね」

工事概要

工事名	(仮称)TCGビル新築工事
工事場所	東京都港区芝4-8-2
発注者	(株)高松コンストラクショングループ
設計	高松建設・青木あすなる建設設計共同企業体、プランテック
監理者	高松建設・プランテック設計共同企業体
施工者	青木あすなる・高松特定建設工事共同企業体
用途	事務所、診療所(患者の収容施設のないもの)
階数	地上18階、塔屋2階、地下1階
構造	鉄骨造・一部鉄骨鉄筋コンクリート造
敷地面積	1,529.71㎡
建築面積	891.18㎡
延床面積	16,488.64㎡
全体工期	2020年9月1日～2023年3月31日予定



完成予想パース (画像提供:青木あすなる建設株)

躯体が完成した(仮称)TCGビル外観。竣工後は高松建設株、青木あすなろ建設株をはじめTCGグループ各社の東京の拠点ビルとなる予定。



1階の吹き抜け空間で資材を搬入中。これらの時間が他の作業に影響しないよう「eYACHO」で調整している。



休憩コーナーで「direct」のメッセージを確認。電話などで相手の時間を拘束せずに伝えられるのも利点だ。

情報伝達の進化と人間関係の深化 その両立が現場運営のカギとなる



上・左/工事情報共有システムによる会議風景。会議そのものの効率化はもちろん、資料のペーパーレス化も図れる。(画像提供: 青木あすなる建設株)

「direct」のグループは用途に合わせて作成でき、そこでのやりとりは所長自身もPCなどを通して閲覧できる。

「現場はいろいろな会社のいろいろな年齢層の人がいて、なかには外国出身の技能者もいますので、会話が苦手な人もいれば面と向かって言いづらいこともある。そういうやりとりをサポートできる側面もあるし、職員にとっては私を含め上席の職員が内容をチェックしているという安心感もあると思います」

大楽所長は、こういった多様なコミュニケーションツールの活用・普及が元請と協力会社、職員と技能者の良好な関係を助長し、現場の活性化につながると考えている。

「どんなにDXを進めても、モノづくりの原点は人であり、手仕事も欠かせないので、我々元請は協力会社の仕事へのリスペクトを忘れてはなりません。『できるのが当たり前』



「eYACHO」の画面共有で図面を確認。現場と事務所など離れた場所でも確認可能だ。

コミュニケーションの 多様化に機敏に対応

現場レベルで導入したツールにはどのようなものがあるのだろうか。代表的なものでは「eYACHO」と「direct」がある。

「『eYACHO』は情報管理のためのデジタルツールで、以前は現場で働く人は皆『野帳』という手帳のようなものを持ち歩いて何でもメモしていたのですが、これを電子化したものです。具体的には図面や毎日の工程、打ち合わせの議事録、搬出入の車両スケジュールなどをこれ一つで管理できます。また、現場職員と協力会社との共有もできるので、伝達漏れや手戻りもなく、現場作業が捗ります」



「direct」の画面。業種ごと、職長会など様々なグループを任意で作成でき、注意喚起や声かけといったこまめなコミュニケーションを促す。

もう一つの「direct」は、LINEに似た機能を持つメッセージアプリで、複数人にメッセージや写真などを一斉送信できる。

「全員に何か指示を送る際、以前はほんの一言で済む内容でもそれぞれの職長に電話して伝えていました。電話がいつもつながるわけではないし、どうしても伝え忘れてしまうこともありましたが、これを使えば短い連絡も写真や図面のリンクも簡単に送れます。指示も明確で職員は事務所から移動せずに管理できるので、業務の負担はかなり減つ



手前に国道130号、左奥にJR山手線・京浜東北線が通る。

前』ではなく、『当たり前前にできること』を評価する。多様なコミュニケーション手段を通じて、急速に変

化する時代にどう対応し、現場をまとめていくか、それが今後の課題になるのではないだろうか」

Webサイト「WorkStyle Lab」で動く現場を見よう!!

建設業界の働き方改革を伝えるサイト「WorkStyle Lab」では、「現場イノベーション」と連動したコンテンツを随時掲載中です。取材先の更に詳しい取組みやこぼれ話など、誌面に載せきれなかった内容を動画などで紹介します。所長さんなどの想いを生の声で、また実際の工事現場の様子を臨場感あふれる動画でぜひご覧ください。たくさんのアクセスをお待ちしています。



WorkStyle Lab
<https://www.nikkenren.com/2days/workstylelab/>